

特集Ⅳ 探検はこれから！？

時は探検を変える

3回生 佐々木 聡 次

現在、全世界を見渡して探検と称される活動がどれだけあるだろうか。それらしく見える活動も、かつてはそう呼ばれていたかもしれない。しかし、今では“二番煎”という言葉に氣にしない人達が氣ままに活動しているようなもので、それはスポーツ化、レジャー化の様相を呈して来ているのではないか。そして、その傾向は他ならぬ我部でも見られ、将来色濃くなっていくであろう。

探検には、「体力」・「知力」・「金銭力」・「フィールド」の4つの要素が必要だと思う。前の3つは個人の努力でいくらでも向上は望める。しかし、創部当時にはまだまだ残されていた、「フィールド」というものは、現在ではほとんど塗り尽された感があると言える。よってフィールド重視で活動してきた我部が混迷の時期を迎えるのは当然と言え、それが現在であり、数年後であろう。ここで以上のような事を踏まえ、我部の将来について考えてみようと思う。

現在、いくつかの新しいプロジェクトが出てきた。これは、現在までの活動に対する不満、不安から発生してきたものだろう。既存の活動の終わりを告げるものともうけとれるが、これは今までの活動を基盤にしての発想の転換時期に来ているということではないか。この状態は、決して悪いことではなく、こういうものが出てこなければ探検部の将来は存在しないと思う。ただ、我々にとっては、過去の活動の中心であった、山やケービングも続けていってほしいのは事実であり、続けていってくれるものがあると信じている。しかしフィールド重視であるこれらの活動にとってその

フィールドがなくなった時、探検部も消滅するということになる。要するに、昔からOB諸氏が考えてこられたような探検を続けようとするれば、いずれ消滅するのではないだろうか。そこで当面は、探検をレジャー風にとらえる者、つまりケービングやボートそのものをやりたいという考えしか持たず、探検的意義などというものは念頭におかないで活動する者との共存の時代になるであろう。ここでレジャー化、発想の転換と2つの方向性が出てきたわけだが、我々は後者に期待したい。レジャー化による我部の将来は存在しないと思うからである。しかし、地理的探検に最後が近づいたと同様に発想の転換にも最後が来るかもしれない。ただこれは我々若者の柔軟な頭脳を持ってすれば、行き詰まるようなことはずっと先、いやその壁は存在しないかもしれない。いづれにせよ、各自が目標を持って、この探検部を背負っていかうではないか。

(26代)

もう一つの Copp

2 回生 田村 公一

現代社会において、25年という伝統の下に、自然、人物、物理的現象を相手に、より優れた探検活動を求め続けている我々は、夢と現実の間で進むべき道を探すのに躍気になっている。しかし、あまりに結果を考え、失敗を恐れる傾向があり、広範に渡る探検的意義を見失っている観がある。

入部当初、誰もが探検という言葉の中に、数多くの夢を求めていたはずである。だが、今や我が探検部は、ある意味で保守的な色に染まりつつある。ある者は、その色に馴染めず、またある者は自分の色と同じであることを喜んでいる。が、一番悪いのは、自分独自の色が、はっきりしていないため、ただ同化されている場合であり、それでは、何の発展もない。

我が部の創設当時、対象とするフィールドは、一個の Copp に例えれば、その入り得る容積は、まだまだ大きかった。しかし、現在の部の活動状況の下では、Copp は飽和状態になっている。この状態を脱するためには、新たにもう一つの Copp を用意する必要がある。これを成し得るのは容易ではないが、柔軟な頭を持ち、行動に移すべきであり、時には、過激なゲリラ的発想も必要であろう。既成の探検活動に甘んじているだけでは、いつまでたっても新しい Copp は出て来ない。たとえ、新しい企画を出しても、審議の段階でつぶされてしまうのでは、とあきらめ顔の者もちらほらいるが、自分が探検部でやりたい事、探検であると確信を持っている事を、素直にぶつけていけば、前進につながるに違いない。すなわち、自らの手でフィールドを作り出して行くことが肝心であり、その力を養うことが早急に必要とされている。金も名誉もない学生にとって、あるのは、行動力のみ、といえるであろう。(27代)

未来に想いを馳せる

1 回生 庄山 あかね

我が部では、現在、全員が何れかのプロジェクトに属し、それぞれのフィールドで活動を行っている。なぜ今のプロジェクトに属しているのか、理由は各人によってまちまちだが、皆、何らかの夢を持っていることは確かだ。

そこで、これからの活動について、具体的に考えると、まず、近い将来の探検部は、全般的には、今とあまり変わらないとする者が多かった。が、現行のプロジェクトの中には、衰退、もしくは、消滅が予想されるものがあり、同時に、新しいプロジェクトの設立も考えられる。そして、大胆ではあるが、すべてのプロジェクトが合体しているのではないかという意見も出た。

次に、遠い将来に想いを馳せると、宇宙での地理的探検が予想され、更に、空間と空間の探検、人間の体内の探検など SF 的要素の強い意見もあった。が、遂に、探検部自体の消滅を予想した、超悲観的な見方もある。

さて、今後の活動に、どうしても欠くことのできない問題に、“フィールド選択”がある。昔から議論され続けているが、今回の話し合いにおいても、幾度となく“フィールド”という言葉が飛び出した。昔、新しいフィールドを捜し求めているが、その開拓が容易ではないことも認知しており、なかなか発見できていない。この点の克服が今後の最大の課題であろう。

将来に向かって、これからも多くの難題が待ち構えているだろう。しかし、今は、一回生として、一回生なりに努力を続けたい。時代が進むにつれ、物の在り方、それを見る人の目も変わって行くだろうが、探検部は、夢を追いかめることが可能な場所であってほしい。(28代)

探検のイメージから

4回生 井上友義

人工衛星が詳細な地図を作る現代では、失われてしまった言葉のイメージであろうか。確かに、例えばONCの地図^(註)を見れば、世界は一目瞭然である。またこの地図がなくとも、世界地図は氾濫気味に存在する。別に探検が世界地図を作るためのものではないが、探検家はこれまで、自分達の生活圏(を示す地図)を広げてきた。また、その生活圏内(地図上)の空白部分を埋めてきた。これらの行為はやはり地図の作製ではなかろうか。

地図といっても様々である。一般的にそれは、地球表面の一部、または全体の形状を、一定の約束に従いながら縮尺して平面上に描写したものののだが、この一定の約束が様々である。単に縮尺が様々というだけでなく、何を対象とした地図であるかが、様々なのである。所謂、山岳地図、都市地図もあれば、河川地図、民族分布図に至るまで、多種多様な地図が存在するのである。この点から言えば、探検はまだまだ生き延びていけるのではなかろうか。

このように、地図が出来上がってしまっていた1950年代、死語と化していた「探検」は、学生の間で突如として蘇ったのである。京大・市大での探検部の誕生である。従来からの山岳活動の中から、所謂“バイオニアスピリッツ”に駆られ、そのエネルギーを「探検」に向けた者が作り上げたのである。関大探検部もまた「南米へ行こう」とばかりに生まれて来たのである。

そして、この探検のやりづらい時代に誕生した大学探検部は、その後時代の状況の変化と共に質を変え、性格をかえ、試行錯誤の末、現在に至っている。“主道”と称する目標がほとんどなくなってしまい、その“主”からそれ“側道”へと枝分れしながら、または葛折りに、クネクネと、発

想を変え、手段を換え、探検の領域に踏み込んで行った。そして、現代の探検家達と堂々と勝負してきたし、何らかの地図を作製してきた。あるいは、地図の作製の一助を為してきたのではなかろうか。

このような状況の中で、皆“探検部”がどう進むべきであるか、いろいろな議論を幾度となく繰り返してきた。探検という定義を追い求めるだけの空想主義者、行動するのみに意義を感じる行動主義者、両者は常に対立を繰り返してきた。我部を例にとると、前者は自らその戦いを放棄し、脱落していった。また行動主義者も、大望を求めず常に自分に身近な所に“探検”というものを追い求めてきた。しかし、これら両者の歩み寄り、協力によってすばらしい探検がなされてきたことは事実である。

そして、現在、我々もまたこの地図作りの枠、探検の枠の中に入り込もうと焦っている。各々の立場(空想・行動)から“主道”に近づこうとする。この時、各々ができるものを考察するのではなく、所謂、地図を作るための行動を模索すべきである。

現代は、不断のトレーニングを積んだ決死の冒険専門家達が、地球上の探検(冒険的)をあらゆる人たちがその旅を楽しみに換えはじめた時期とってよいだろう。よって我々としては、これを越えたものを求めなければならないし、数十年後に旅と化されるであろう行動の、地図を作らねばならない。

探検はあらゆるものの先駆者である。その事を誇りとして持たねばならないし、その前に、先駆者としての目、知識、体力を築いて行く努力が必要であろう。それこそが、所謂、バイオニアワークとつながっていくのではないだろうか。(25代)